

SHOW MEY シネマール-4

★★★

ナチュラルウーマン

2017年/チリ・アメリカ・ドイツ・スペイン合作映画

配給：アルバトロス・フィルム/104分

2018(平成30)年3月16日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督：セバスティアン・レリオ

脚本：ゴンサロ・マサ/セバスティアン・レリオ

出演：ダニエラ・ヴェガ/フランチェスコ・レジェス/ルイス・ニエッコ

■ショートコメント■

◆公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

ウェイトレスをしながらナイトクラブで歌っているマリーナは、年の離れた恋人オランダと暮らしていた。マリーナの誕生日を祝った夜、自宅のベッドでオランダは突然意識が薄れ亡くなってしまふ。最愛の人を失った悲しみの最中に不躰で容赦のない差別や偏見を浴びせられる。ふたりで暮らしていた部屋から追い出され、葬儀にも参列させてもらえない。マリーナにとって、ただ愛する人に最期のお別れを告げたい、それだけが唯一の望みだった——。理不尽な現実を乗り越えて前を向いて歩き始める彼女の姿に、観る者はいつの間にか共感し、幸せを祈りながらエールを送ってしまうはずだ。

ヒロインを演じるのは、自身もトランスジェンダーの歌手であるダニエラ・ヴェガ。トランス女優として初のオスカーノミネートもささやかれる注目の逸材だ。監督は、パブロ・ララインを輩出するなど躍進目覚ましいチリ映画界が生んだ才能、クリスティアン・レリオ。自身の前作『グロリアの青春』(13)がジュリアン・ムーア主演でハリウッドリメイクが決定するなどさらなる注目が集まっている。プロデューサー陣は『ジャッキー/ファーストレディ 最後の使命』『ありがとう、トニ・エルドマン』などの実力派が集結。

“人生の向かい風”を象徴する嵐の中を歩いていくシーンなど、ラテンアメリカ独特のマジックリアリズム的世界観で表現される場面も忘れ難い。また、劇中の音楽もマリーナの心象を語り、ダニエラ・ヴェガ自身が歌うヘンデルのアリア「オンブラ・マイ・フ」や、アレサ・フランクリンが歌う「(You Make Me Feel Like) A Natural Woman」は、どんな時も当たり前前に“ありのままの女”でいさせてくれる人への深い想いが胸を打つ。

◆チラシを見ても、予告編を観ても、アップで映るダニエラ・ヴェガ演じるマリーナの意思の強そうな顔と目力の強さが目立つが、これが性転換によって男から女になった女優の特徴!? 「この手の映画」に飽きてしまった私は、それを知っただけで本作の鑑賞は無しと決めていたが、第90回アカデミー賞で、「ザ・スクエア 思いやりの聖域」(スウェーデン、ドイツ、フランス、デンマーク)、「ラブレス」(ロシア)、「心と体と」(ハンガリー)、「ジ・インサルト (原題)」(レバノン)を押しつけて本作が外国語映画賞を受賞したと聞き、映画館へ行くことに。

◆しかし、導入部における恋人オランダ (フランシスコ・レジェス) とマリーナとのイチャイチャ関係(?) を見ているだけで、私は少しゲンナリ……。そして、本作で私が納得できないマリーナの行動は次の諸点だ。すなわち、

①前夜にセックスまでした年輩(初老?) の男オランダが朝になって急に倒れ込んだら、素人治療はせず、何をおいても救急車を呼ぶのが常識。それなのに、マリーナは……?

②オランダが突然死した後の相続について、もしくは特別寄与者として、マリーナは自分の権利を主張するのか否かを明確にすべき。ところがマリーナは……?

③マリーナが自己の権利の主張をしたいのなら、“謎のキー”を相続人たる妻子に引き渡さないのはダメ。ましてや、一人で勝手にサウナまで行ってそれを使うのは如何なもの……?

④女刑事の強硬かつ巧妙な口車に乗せられて半分違法な捜査に渋々乗っていくマリーナの行動はいかにもバカ。納得できないのなら、それこそ弁護士を立てて敢然と戦うべき。それなのに……?

⑤オランダの葬儀に参列しないのは妥当だが、参列する権利を主張したいのなら、然るべき手法をとるべき。ところが、本作に見るマリーナの行動は……? こりゃ、最悪! なぜ、こんな映画が外国語映画賞に……?

◆2018年2月5日付日経新聞夕刊は「トランスジェンダー映画 公開相次ぐ」 「性別違和 繊細に力強く」の見出しで“その手の映画”を解説し、本作をメインで取り上げている。その他新聞紙評でも、本作は概ね好評だが、私にはどうも……。

とりわけ、北小路隆志氏(映画評論家)は、本作冒頭のイグアスの滝の空撮の美しく壮大な光景は「寛容なる理想郷の隠喩であったのだろう。」とし、またオランダが彼女を励ますように度々幻影となって現れるのは「現実逃避のファンタジーではなく、現実の不寛容さや醜悪さを告発するための武器だ。」と積極的に評価し、「現実と幻影のあいまいにこそ宿る、映画ならではの魅力や批判の力に溢れている。」とまとめている。それはそれとして理解できるが、これも私にはどうも……。

2018(平成30年)年3月20日記